月　刊

# Mélange

Vol.123

2017.05.21

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.123　2017.05.20
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」123号　目次

## 詩＆俳句


虚の疾走……野口 裕　03

華詠 (俳句) ……岩脇リーベル豊美　03

我らを悪より……／唄うた唄おう／タヌキ岩から／国内線ターミナル／蕾いまだかたくも　明石公園の夕べ　……北岡武司　04

みぎり　……大橋愛由等　06

とりめくも……中堂けいこ　07

白梅ララバイ ……高谷和幸　08

引き裂かれ ……有時秀記　09

花見／アメンボ ……中嶋康雄　10


## 連載／詩評・エッセイ


神戸詞あしび 112「猫と生きることとは　いのちを考えること」……大橋愛由等　12


編集部だより★42／とある刺激をうけて変わることがある。それは変りたいという潜在意識がもともとあって、たまたま出会ったその出来事を契機にするといった方が正しいのかもしれない。フランス映画「未来よ　こんにちわ」（ミア・ハンセン=ラブ監督、2016）を観て、わたしの中に変化がもたらされた。主人公ナタリは、パリにあるリセに勤める哲学教諭。夫も同じくリセの哲学教諭であり、自宅アパートには多くの哲学書に満たされている。ナタリはどこに行くにも読書をかかせない。離婚してしまったが夫もまた本の虫で、新しいパートナーとなったスペイン女性がクリスマスで母国に帰ってしまって（スペインの家族の結束力は強く特にクリスマスは家族水入らずで過ごすことが多い）、パリでひとりぼっちのクリスマスを迎えることになっても「本が読めていい」と気にすることはない。こうした本まみれの作品を観て私のなかにスイッチが入った。本を読もう。本の世界に生きよう、と。／今月の読書会は「虫の詩人」と畏敬される中嶋康雄氏の「擬態」から始まる虫のワンダーランドについて語っていただく。彼もまた本の虫である。（大橋記）

## ◆虚の疾走

野口　裕

実体と実体を分かつのが虚であるなら
虚と虚を分かつのは
実体であると同時に
実体以上の何かである

水の上を走る水の玉は
水に溶けぬよう
極限の走りを要求される

走りつくして
水玉は水と水の間隙に溶け
手応えは水の中に残る

あるいは

朝日を浴びた少女が
湖に身をひたして
水から水の玉を取り出し
手に載せたそれに器を必要としない
少女が恋をするまでそれは続く

というような民話を
どこかで聞きかじった

そんなことを思いながら
急須の出がらしの一滴を
すこし凹んだ茶の面にぽとり

じんわり浮かんだ出がらしの宝玉は
身じろいだかのようにその場にて
しばしたゆたい
すっと茶に溶け込んだ

数あれどみな眼がひとつ合歓の花

## ◆華詠

岩脇リーベル豊美

バブル期の合歓色ネオン異次元再現
永劫に隷従しないための馬酔木花
立体交差道ペインティングの薔薇花弁と涙
臓器売る国の人と間違えられ石楠花の心房
リラ肝臓芍薬肺臓枸杞膵臓のおままごと
リラの雨降り注ぐ心の形した葉っぱ
竹ちゃん菊ちゃん女性三部合唱のピアノ伴奏
天使のトランペットは美毒復讐につかう
若者が生きたかったと羨む古生代の花粉
アカシアの風このまま腐り火酒となる
トルコ人園児が名前を訊くのでヨーミと答える
漢字で意思疎通図った中華人消息気体
真夜に目醒め世界の猫眼石に埋まる
我々の旧都ハイデルベルグよ音痴と胃炎
ウムラウトで乗り間違えたミュンヒェン行きのまま
廃駅の盲導犬背に雪華積もり
ガルテンツベルク舞い立つ湖畔に移り住もう
テサロニキ信徒への手紙に血でしるした十字架
鋏研ぎがベルを鳴すからお願いします
警官はベンチ占領難民のパスを捲る
時限装置の気持ちティックタック警官気づく

## ◆我らを悪より……

北岡武司

ウマの背を夕日がそめます
体中の骨が砕けそうです
悪霊が私を蔑み嘲るのです
とおく壁をながめ日没を待ちます

どうすればよいのでしょう
息を吸うのも吐くのも苦しい
私をうちのめす悪霊と戦うには
おなじ悪霊を養うのでしょうか

体中の骨が砕けそうです
どこへ行けばよいのでしょう
タヌキ岩の穴蔵で横たわりましょう
ウマの背から赤い月が昇ります

月がたかくしろくなれば
草むしろで光をあびるのです
体中の骨が砕けそうでも
そのとき私は光り輝くでしょう

タヌキ岩の穴蔵に横たわった私を
どうかそばで見守ってください
この心に悪霊が入らぬよう
私のところにいらしてください

きっとあなたは月光に溶けて
私を照らしてくださいます
私のたったひとつの願い
誰をも蔑み嘲りませんように

## ◆唄うた唄おう

北岡武司

遮断機の唄をききにいこう
ネンチ　テンチ　ネンチ　テンチ
遮断機といっしょに君がうたう唄
遮断機の唄　うたう唄
唄ってご覧

幼稚園の丘のうえまで
手をひかれてあるき
低地のむこうの丘を見やって
列車がくるのを待てば
ネンチ　テンチ　ネンチ　テンチ

踏切からあの唄が聞こえてくると
こらえきれずに君も唄うたうたう
ネンチ　テンチ　ネンチ　テンチ
電車が通りすぎると両手をまわし
ガタコン　ガタコンと
足踏みをして君はおどる

とおいとおい日のこと
いまも踏切の音がきこえると
君の唄をくちずさむ

ネンチ　テンチ　ネンチ　テンチ
ああなんて懐かしいのだろう
君のよろこぶ顔が唄っている

いまは北のはてで
オーロラを撮影する君
ガタコン　ガタコンと列車が雪原を走れば
ネンチ　テンチ　ネンチ　テンチ
その心にこの唄がきこえてくるだろうか

## ◆タヌキ岩から

北岡武司

あの壁が風をさえぎってくれ
あの壁から月が昇ってきます
ゲンゴロウやタガメを食べて
みんな眠くなったでしょう

さあさ　みんなあなぐらで寝ましょう
ウマノセから赤いお月さまがでて
光が射してきたらあおくなりしろくなり
まぶしくて眠れません

下でムクとハゼが枝をこすりあわせ
喧嘩して泣声をあげます
悪魔の声のようでこわくて
こわくて眠れなくなります

さあさ　そのまえにはやく寝なさい
お父さんとお母さんはこれからひと仕事
ふたりで人の女に化けます
人を幸せにする大切な仕事です

上の神社からおりてくる人に
酒を飲ませ懐の財布をいただくのです
みなだまされるのがすきです
だまされなければ生きていけません

だまされずとも自分で自分をだます
嘘だとわかって信じるのです
だからお父さんとお母さんとで
みなさんを幸せにしてあげるのです

## ◆国内線ターミナル

北岡武司

旅客機のエンジン音ではない轟音が
猛烈な火を噴いて滑走路を疾駆し
南海の夕空へ次々飛びたっていく
火山が膨らみ　たゞよう噴火の気配
不安は抱きしめるより知らん顔がいちばん
滑走路が混み着陸が遅れるかもしれない

機長のそんなアナウンスは
スクランブル発進のことを謂っていたのだ
心のなかのうごめきは覆い隠せばよい
ばかばかしい番組を見て笑おう

笑わせようとしてくれている
笑ってあげなければと
視野を狭める　目をそらせる
列島の隙間を外国（とつくに）の
爆撃機や艦隊がぬけていく

パソコンで仕事する人
コーヒー飲みながらテレビ見る人
搭乗口近くでは火山の膨らみは無縁だ
知っても無縁なのだ
知らないのは私のせいではない

火山は膨らんでも噴火したわけではない
どの番組にもおなじ顔がでてきて
何がおかしいのか分らないやりとり
馬鹿笑いする芸人　あわせて笑う私
列島津々浦々のグルメ番組

ツナミがきても戦闘が起こっても
出来事の只中で出来事の全貌はみえない
歴史のどの位置にいるのかもわからない
何が起こり何の渦中に
自分がいるかもわからない

## ◆蕾かたくも

明石公園の夕べ

北岡武司

あやしきかほりただよふ夕（ゆうべ）
酒まわりて
それぞれに
詩（うた）を朗唱し偲ぶは
語りつたえの乙女子のことよ

櫓むこうの
池に入り蛇となりしとかや
思う人と結ばれぬ
嘆きゆえか

汝（なれ）を偲び
枝をみあげ舞わん　この我も
あやしきかほりただよふ夕なれば
みなもにうかびたる月ながめ
蕾みいまだかたくも
朗々の詩（うた）にあわせ
いざ舞わん

## ◆みぎり

大橋愛由等

わたしはわたしを幽閉している
(若葉を見つめていたら、そこが五階だったので、琥
珀の群れがゆっくり近づいてきて。だから三叉路の
曲がり方が間違っているとわかったから。銀狐が言
うの。玄関のダリアはもうとっくに沈黙に疲れはて
て旧仮名遣いへの旅にでてしまったよ。そうなん
だ。栞には葉脈の優美が語られていなかったせい
か、素朴実在論者なんだと決めつけていたけど。路
面電車がいらだちながらきんきん音を立てて通り
過ぎてゆくと。乗っていた歌人は口をぱくぱくさせ
ながら南十字星を捜していたため見つけられなか
ったんだ、銀狐を。石垣の隙間に咲いている群青色
の花に語りかけるつもりならヌースを右手に握っ
てかつゆっくり手放すとうまくいくよ。でも括弧は
イヤなんだね。断つこと毀れることを掛け布団のな
かに隠したって、官能はそっと探し出してくる。す
べては—そう官能はこの表現が好きなんだ—毀れ
ていくものだから誰も見ていない路地裏で握りつ
ぶしたっていい。少しだけ泣きながらね。そしてそ
れはおぼろ。春蝶たちは街角が蒸れていくのを知っ
ていて。スキップしすぎて息が荒い五月の風が公園
の楠の樹下にいて。午後のカフェ・コン・レチェを
呑むため琥珀が双棒を連れてやってくる。

## ◆とりめくも

中堂けいこ

やみくもに十倍にふやしたときから雲は頭上にわきあがり、クラ
ウドってクラウドの影がたちのぼりはしないか、いつかのあひる
たちは羽毛をぬぎすて人々は彼らを身に纏い寝屋にしきつめ営
みの浮きしずみをまかなう、無音の鳴き声を誰が聞いたか
赤いりんごのひと齧りから欠けた部分が気にされてばかり
なにも、
それは、
わたしが食べました、と
毒を食べてしまいました、と
あなたは魔法使いね、そうよ、今日一日フォンをなくしてクラウ
ドに預けてしまいました
それでそんなに腹をふくらませて鳥たちに喰わせたのかい、い？
鳥のぬくみを盗んだむくいを受けている、彼らの翼膜を追い落と
し羽と雲を盗む輩は毒をあおって
それから流行性感冒にかかるのよ
それからゆっくりりんごを齧るといい

## ◆白梅ララバイ

高谷和幸

白梅さん。うすあかりばかりの白梅さんはには臓器がない。(ジャン・リュック・ナンシーに似ている。カネータにも似ている。にしわきにも似ている。バルザック・ボルヘス・プルースト・かわばたやすなりにも似ている)「臓器がほしい?」彼という生命は地層に新たな地表をかぶせる、いらだった亡霊(ゾンビ)なのだ。まだ寒かった春先に身体(コール)の分岐点(呼ぶ声の交錯する暗がり)からかさぶたが芽生え、それらに黒衣を着た姉たち(sifter)が手をつなぎ集っていた。それのそれや、これのこれがふくれあがる。わたしの目の前で(盲目である)、わたしの見られる白梅さんは「わたしがひとつとして数えられるときに。それがひとつであることを知る」ひとりに触れることが「ひとりであるもの(shell の亡霊)の中にひきこもって」いる。姉(sifter)の胸元の黒いかたまり(同一性)がきれいだ。白梅さんとの入念な打ち合わせの結果、ここまでやってこられた。それは冷蔵庫の扉の開閉の度に現れる濃密な空間に似た白梅さん(話者・ゾンビ)の「機械生命的な進化へ」と思った。折れてしまいそうな首をわたしの爪先でこすったのもひとつの選ばれた可能な世界だったのかも知れない。白梅さん(作者)は完全に作品に沈み込み、聞き取れない、ひとつひとつのことばでうすめられていた。鉢植えのような宇宙で「彼らは一度死んだのだ」。臓器が欲しかった白梅さん。この道はどこまでもうすらあかりばかりだった。



## ◆引き裂かれ

有時秀記

瀕死のベッド上から突然あふれる涙は強い意思を持つ母の、死への意思の現れであり、とどめようがなく、親和性のある「それ」は静かに見守ることしか叶わない。その見守りが「空ずる」を知悉した涙の主には癒しになったかどうか。いやしかし親和性という力は、少しは癒しになったと「それ」は思う。涙はやがてとまるが、「それ」の内界と「空ずる」母の内界に地下水のように滔々と流れ出す。川は視えないものとなり、その不可視性により、「それ」は自らに歪みを発生させ、「引き裂かれ」が顕現する。

引き裂かれの顕現により、「それ」は、過去の生の記憶を呼び覚まされ、そのような歪みはかなり以前からあったのだと覚醒し、歪みは意識に上る。「それ」は過去の残滓に生じた傷に由来する歪みを倍加する。歪みが「それ」を引き裂き始めるから感覚は痛みだけとなる。涙の川は内界を経て天上に続いていた感があるが、引き裂かれはあくまでも地上的である。

この「引き裂かれ」は時空が歪むようなものでなく、形なきものが歪み、ヒリヒリと「それ」は引き裂かれる。涙の川は死の谷を超えて今や透明になっているが、記憶のよみがえりによる歪みと引き裂かれは「生」からのものであるから、宙吊りの痛みをもたらす。もっとも、よみがえる記憶の鼓動は、潜在意識の下で「それ」をずっと引き裂いていたというのが正しいだろう。

引き裂かれは、いま一人の意識不明の親しき身体が突然消えてのち、さらに三重化する、「それ」は宙吊りのままで、絞られる。濡れた布が絞られるように絞られる感覚。絞られる感覚で引き裂かれ、痛みから「それ」は宙に跳ぶ。突然消えてしまった身体は、「それ」の内界に生前の現像を幻として残したので、「それ」は痛みを少しばかりやわらげることがある。

内界から天上に流れ出した涙の川と、内界に現前する幻には、地上的形はもはや無いのだが、しかし、「生」そのものが持つ希望へ道が、逆説的に「それ」そのものの引き裂かれを顕現させるのである。重なる引き裂かれにより、「それ」が宙に跳んだために、地上性は天への階梯を数段歩んだのち、バベルの塔のごとき、しかし、視えない塔を顕現させる。

しかし一方、「生」はなおも先行きの希望を持とうとするが、歪みのために、希望が迷走し、さらに追い打ちの二重の引き裂かれをもたらす。「引き裂かれ」は「それ」の生を引き裂く。濡れた布を引き裂くように「それ」の内界を二重、三重のうえにさらに四重五重に引き裂くのだが、「それ」は痛みを強く感じるものの、形を持たないために、「引き裂かれ」そのものは不可視である。

誠のことは「それ」が引き裂かれの痛みを強く感じ、「引き裂かれ」がさらに深みを漂い、「それ」そのものの存在の深化を促すことだけである。いまや「引き裂かれ」としてある「それ」は存在の至高点に近接し、視えないバベルの塔に登っている。塔を経めぐる深みのある存在の風を受けながら。

未見の顕現は引き裂かれの五重奏のごとき重なりに基づくのか。希望は絶えた望みと同根であるが、「それ」は「引き裂かれ」の至高点において、形など視えないままに、「それ」の稀なる変容を確かに顕現(エピファニー)するだろう。その時、啓示はあるだろうか? 至高点(トポス)の、その見えざるバベルの塔のごとき場は五重の「引き裂かれ」を身にまといながらも。

「引き裂かれ」は啓示の前触れとなる音楽であるのか? 「それ」は独りその音楽を聴いているのか? 元来地上的な「引き裂かれ」が呼び覚ます深層に響く音楽のエピファニーを「それ」は聴いているのか? いや、エゾテリックな音楽のエピファニーが「それ」を呼んでいるのではないのか?

## ◆花見

中嶋　康雄

ビニールシートの下に
なにかがいる
ビールを飲んでいる男が
向かいにすわる女の
ジーンズを見ている
女はとなりの大きな女と
ハリウッドの激やせした俳優のことを話している
となりの大きな女は
相槌を打つ度にさらに大きくなっていく
無限に大きくなっていく
ビニールシートの下で
なにかが雨乞いをしている
ビールを飲んでいる男が
不安そうに空を見上げる
ビニールシートの下の土が
ミミズに食い尽くされ
ビニールシートが浮かんでいる
上では宴が続けられている
歯が歩きまわっている
ぞろぞろ歩きまわっている
誰の歯かわからない
小さな子どもと遊んでいる
小さな子どもが
歯と歯に噛まれて
血塗れになってきゃきゃっ笑っている
誰の子どもかわからない
誰も自分に歯がないことに
気付かないのか
気付いているがそっとしているのか
どうでもいいことが話されている
世の中はどうでもいいことで溢れている
どうでもいいことが世界の中心で
そうでないことは世界の片隅で
花はわけへだてがない
小鳥がスナック菓子の欠片を一心に
啄んでいる間を盗み
ミミズがどんどん合体してゆく
ミミズが平べったい巨大な生き物になり
楽しそうに踊っている
ビニールシートを踊りに誘っている
川で魚が跳ねる
子どもの頭より大きい魚が
見わたす限りの川面で一斉に
月のウサギが怖がって歪んでいる
びっくりした数人が
魚に指を食われて笑っている
ない指をさしあって笑っている
急に大きな雨粒がばらばらと降ってくる
ビニールシートが花見をやめる
人はそれに包まれたまま
暗いどこかへ帰って行く

## ◆アメンボ

中嶋　康雄

雨が降り続き
水溜まりができている
アメンボが滑っている
アメンボの数が増えて増えて
数秒後ぎっしりのアメンボで水が見えなくなる
幼いぼくが黒い長靴を履いて
アメンボを踏み潰すのを
母が見ている
母は諦めきった表情を浮かべ
幼稚園のせんせいとなにかを話している
せんせいと母がいつまでも話をしている
ぼくは五十才になり
それでも母を待っている
幼稚園は市の方針で保育園と統合して
こども園になったが
水溜まりにアメンボが滑り続ける
小さいアメンボ
大きいアメンボ
速いアメンボ
遅いアメンボ
ぼくは踏み潰し続ける
黒い長靴からぼくの足の指が飛び出し
黒い毛が生えている
爪が醜く伸びている
ぼくはおしっこしたくなり
いつものようにズボンからおちんちんを出し
背高のっぽの
白い綿のようなタンポポの帽子をめがけて
おしっこを発射する
こども園の関係者がすっ飛んできて
ぼくに厳重注意するのを
ぼんやりと聞くともなく聞き
重くなったちんちんを見ると
縮れた黒い毛がはみ出している
ぼくの濁ったおしっこのせいで
水溜まりの表面張力の具合がおかしくなり
アメンボが溺れている
ぼくのおしっこを浴びたタンポポの茎が
にょきにょきにょきにょき
鉄骨鉄筋コンクリート造三〇階建になり
同級生たちがぼくのちんちんの横を通勤している
同級生には
ぼくのおしっこもちんちんも毛も見えないらしい
辛いことがあったらしいいじめっ子の同級生が
ションボリと下を向くと
ぼくのおしっこに突然気付き
いやないやな顔をしている
ぼくには声をかけてくれない
ぼくは彼らに見えているのだろうか
見えていても仕方がないので
ぼくは彼らに見えていないと勝手に思うことにして
母とせんせいの話が終わるのを
アメンボを踏み潰しながら
ずっと待っている
アメンボという名前は
飴のような臭いからきたらしく
踏み潰すと
安物の甘い飴のような臭いがして
虫歯がまた痛み始める

# 神戸詞（うた）あしび

## 112-2017.05.20 大橋愛由等

# 猫と生きることとはいのちを考えること

▼猫の話をしよう。拙宅の〝内猫〟（家猫ともいう。室内で飼っていて外には出さない）はシオンという名である。サビ猫と言われ、猫族が遺伝するすべての色が体毛にでている。このサビ猫はメスしかいないそうだ。人見知りするが、頭がよく、家人が言い争っていると、その両人の間に割って入りニャアと鳴き、仲介役を果たしたことがある。

写真に写っているのは〝外猫〟（敷地内に住んでいるが家の中には入れない）の一匹「むすめ」である。早朝、新聞を取りに玄関のドアをあけるとこの「むすめ」とその母猫「はは」と、もう一匹の黒猫が待ち構えている。ときどきこの三匹にエサをやるので、適度な距離を保って付き合っている。三匹のうち、「はは」だけは、人間と猫たちとの親愛の儀式である人差し指を近づけてそれを猫が匂いを嗅ぐ挨拶行為をする。ほかの二匹に比べて警戒心が薄いのできっとかつては家猫だったのだろう。

わが家の外猫。名は「むすめ」

拙宅の道路一本へだてて隣接している公園には、いわゆる「地域猫」が住んでいる。避妊手術が終わった猫たちで、毎日その猫たちにエサをやる「猫おばさん」「猫おじさん」が出没する。キャッツフードを定期的に食べているので、わが家の「外猫」同様、毛並みがいい。猫たちには恵まれた環境であるといえよう。

▼こうした都会で人間たちに暖かく見守られている猫と違って野生化した猫を「ノネコ」という。猫は家猫であっても野生の姿を保っていると言われる。この「ノネコ」は人間の力を借りずに自ら狩りをして生き抜いているので、特に貴重な動物・昆虫などがいる地域ではその存在は大きな問題になっている。たとえば奄美群島ではこの「ノネコ」は、アマミクロウサギを捕食することもあるようだ。地元新聞でも大きく取り上げられて駆除の対象になっている。野生化した「ノネコ」は集団で行動することもあって、深い山奥で集団で移動する「ノネコ」たちを見た人は、まるでライオンたちのようで、威圧感が半端ではなかったそうである。

▼わたしは犬もかわいいと思っているが、どちらかというと、全きの猫派である。一日のほとんどを寝て暮らしている彼らが羨ましくて仕方がない。さてその猫たち。亡き母にいわせると猫には三種類いるそうだ。〝トコ〟〝ムコ〟〝ネコ〟である。〝トコ〟は鳥を取るのが得意な猫。〝ムコ〟は虫を取る猫。そして〝ネコ〟は鼠を取る猫なのである。

〝ムコ〟のエピソードをひとつ披露しよう。阪神・淡路大震災が起きた時のことである。地震が起きて街が崩壊し、人間たちが大騒ぎしているとき、一匹の飼い猫が外に出ていった。家人は猫にかまっている暇はない。やがて帰ってきた猫はどこで捕まえてきたのか、四匹の虫を玄関に並べておいている。四という数字は、その家の家人の数である。その猫はきっと人間たちが震災で大変な目にあっているので、なんとか自分なりに力になって励まそうと思って捕まえてきたのだろう。猫の恩返しである。この話しを聴いたとき、すべての猫がいとおしく感じられたものである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.123
神戸

2017年05月20日　通巻123号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税別)